

## II. 募集・選考にあたっての領域総括の考え方

領域総括：片山 恒雄（東京電機大学 教授）

この領域が目指すもの、それは「犯罪からの子どもの安全に向けて、社会技術としての防犯対策を日本で普及させる、具体的には、科学的根拠に基づく知見・手法を創出し、地域での実証・政策提言など、社会実装に資する成果を生み出す」ことです。

最近の社会情勢を見ていると、犯罪からの子どもの安全が大切な課題であることは誰の目にも明らかです。問題は、この課題が従来の多くの研究開発課題とはだいぶ異なる性質を持っていることです。従来の多くの課題は、時代の最先端を行く研究者が、それぞれもっとも得意とする分野で研究成果を競い合うことによって成り立っていました。しかし、今回の新しい分野を犯罪という面から見ると、警察というかなうことのできないプロ集団があります。

ただ、毎日の生活の中で、子どもの安全を自分自身の身近な問題として捉えている人たちが、家庭、学校、地域住民、自治体、NPO、企業など、地域コミュニティを構成するあらゆるセクターにおられます。地域のリーダー、学校の先生、自治体の関係者など、関心はあるがどうしたらよいか分からない人たちが、問題解決の手段を持つ人たちと協働することによって、両者にとって意味のある具体的な成果を生み出していただきたい。

研究のための研究は望むところではありません。研究開発費は単なる助成金ではないのです。必要度が高い課題を対象に、研究代表者が中心となって、明確な研究目的と限られた期間内での達成目標をなるべく具体的に定めていただくことが特に大切になります。大学等の研究者だけでなく、適切な研究グループを編成して、優れたプロジェクトを作るためには、時間と費用が必要ですから、この研究開発領域では、プロジェクトの企画調査に関しても、公募を行うことにしました。

2回目の公募となる今回は、防犯教育や防犯技術の受容・活用のみならず、まちづくり、地域活動等さまざまなアプローチから、犯罪から子どもを守ることに貢献するプロジェクトの提案を期待しています。

昨年度の募集で大変多かった防犯技術の開発に関しては、単なる見守り機器開発等の開発研究に留まらず、防犯技術を実装・運用していく中で生じる問題を地域で議論し意思決定していく仕組みを構築し検証するなど、社会実装に向けた取り組みや検討が含まれた提案としていただきたい。

地域で子どもを犯罪から守る取り組みについては、優れた取り組みを展開している地域の事例を取り上げ、活動を行う中で、どのような壁にぶつかり、それらをどう乗り越えたかなど、これから活動に取り組もうとする人たちや、活動を継続していきたい人たちに役立つ知見を収集・分析し、犯罪からの子どもの安全確保に資する地域力とはどのようなものかを事例に基づき提言する。そのような研究開発の提案にもぜひ手を上げてほしいと考えています。

また、対策の基盤となる、体感治安・不安とリスクコミュニケーションの問題や、法制度に関する政策提言に取り組む研究、子どもを犯罪に巻き込むことのない社会や都市環境のあり方などの研究も重要です。いじめや虐待、子どもが加害者となることへの対策等については、犯罪被害から子どもを守ることに明確に結び付く提案であれば、平成 19 年度公募と同様、本プログラムの対象となります。

インターネットや携帯電話の普及によって急速に発展する情報社会における犯罪から子どもを守ることも喫緊の課題です。違法・有害情報等が子どもに与える影響の科学的根拠に基づく分析や、フィルタリング、情報モラル教育、ネット内の見守りの仕組みづくりなど多様なアプローチが考えられますが、問題の実態や特性を踏まえた持続的・効果的な対策の提案を期待します。

また、研究から得られた知見・情報を効果的に活用することを可能とし、問題に取り組む人たちと、解決に資する知を有する人たちとの協働を推進する、サイエンスショップのような仕組みを構築するための提案も期待しています。

この研究開発領域で求められているのは、個別的な研究課題の単なる足し合わせではありません。採択された課題が相互に関連しあい、有機的に結びつくことによって、「犯罪からの子どもの安全」に役立つ成果が得られることが大切なのです。プロジェクトが発足した後も、それぞれの研究課題が全体の研究開発領域の中でどのように関連すべきかについて議論を交わし、必要に応じて軌道修正をしていただきながら、プロジェクトが全体として望ましい方向へ向かうことにご協力いただかなければなりません。

なお、今年度の公募においては、研究開発費の規模として、原則として研究開発プロジェクトについては最長 4 年、年間 5 千万円程度、プロジェクト企画調査については 6 ヶ月で 3 百万円程度を上限とし、多くの課題を採択することを考えています。ただし、きわめて優れた提案であれば、上限を超えても構わないものとします。

難しい研究開発領域ですが、それだけにやりがいのある分野とも言えます。多くの方々のご応募をお待ちしています。